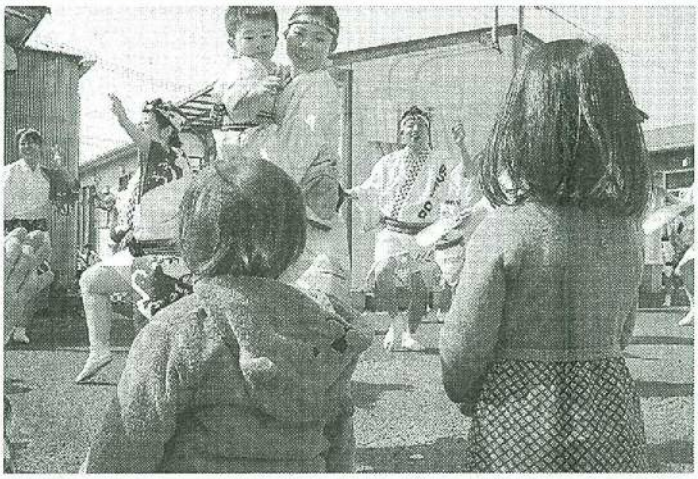
ポラスグループ

南越谷阿波踊りで慰問

地元の連と宮城の仮設住宅に

仮設建築を契機に 震災翌年から毎年



踊りを眺める住民の子ども（上）、海岸から約670㍍の場所に建つ震災慰霊碑と説明を聞く有志連参加者

埼玉県南越谷阿波踊り振興会傘下の有志連が12日、宮城県名取市内の美田園第一仮設住宅地を訪れ、住民を阿波踊りで慰問した。慰問は、地元貢献で南越谷阿波踊りの活動に力を入れ、社内連も抱えるポラスグループ（埼玉県、中内晃次郎代表）が、同仮設住宅の建築に携わったことから始まった。訪れた慰問団に同住宅地の高橋善夫自治会長（72歳）は、「当初入居していた127世帯が今は20世帯ほど減った。ここで亡くなった人も20人程になる。（元の居住地・閖上地区に戻れるには）早くてもあと3年はかかるのでは。一番良い仮設住宅を建ててくれた上に、こうして毎年訪れて阿波踊りを披露してもらい、感謝の言葉しかない」と話し、謝意を示した。

有志連は震災翌年の2012年から慰問を実施しており、4回目の今年は過去最多となる約80人が参加した。同仮設住宅地の住民は半数が65歳以上の高齢者のため、自治会ではそれら住民の心身のケアになる企画を実施する努力を続けている。

また、有志連の参加者は仮設住宅地入り前日の11日、同住宅地の居住者が以前住んでいた名取市閖上の被災地を訪れ、昨年8月に建立された慰霊碑の前で手を合わせた。慰霊碑の高さは当地を襲った津波高と同じ8・4㍍で、芳名板には亡くなった944人の名が記されている。

慰霊碑の前では自身も被災した同地区元住民のボランティアが、芳名板に刻まれた友人の名を示しながら、当時の状況を説明。有志連参加者たちは静かに耳を傾けていた。